

研究課題 (テーマ)		訪問看護師からみた急性期病院からの在宅訪問の課題	
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	在宅看護学講座	助教	北林 正子
分担者	在宅看護学講座	准教授	河野 由美子
		講師	山崎 智可
研究結果の概要			
<p>訪問看護師からの視点で、急性期病院看護師の在宅訪問の課題を明確にする事を目的に、訪問看護師にインタビューガイドを用いて半構成面接を行なった。</p> <p>研究参加者の訪問看護師は11名、全員女性で経験年数は2年～19年であった。訪問看護に従事する前は、全員が臨床経験を有していた。</p> <p>急性期病院看護師と一緒に同行訪問を行った訪問看護の利用者は、4ヶ月～5ヶ月の小児、30歳代～80歳代の成人・老年期の事例であった。主な疾患は、超低出生体重児、難病、心疾患、がん疾患、その他であった。医療的ケアが必要な利用者は8名であり、その内容としては人工呼吸、在宅酸素、気管切開、吸痰、胃ろう、在宅用高カロリー輸液、持続点滴、人工肛門、膀胱留置カテーテル、その他のケアであった。</p> <p>在宅訪問（退院前訪問や退院後訪問）に関する内容を抽出し、共同研究者らとコード化・カテゴリー化を行い分析した結果、73のコード、31のサブカテゴリー、11のカテゴリーが得られた。カテゴリーは、【在宅療養に向かう利用者・家族への病院看護師からの精神的サポートの機会】【病院看護師からの情報・技術提供による切れ目のない継続看護の確認の場】【病院看護師と訪問看護師との連携強化】【病院看護師の在宅療養をイメージできる退院支援能力向上】と言った肯定的な側面、【訪問看護師のニーズに応じた専門的知識をもつ病院看護師との同行訪問への期待】【日頃からの病院看護師と訪問看護師との顔の見える連携の期待】とする期待や要望、【病院看護師による利用者・家族への同行訪問の説明不足と負担】【利用者・家族に対する病院看護師のコミュニケーション能力不足】【病院看護師から訪問看護師への同行訪問の目的や評価の伝達不足】【病院看護師との同行訪問が与える訪問看護師への負担増加】【訪問看護師の病院看護師との同行訪問に対する不安】などの困惑であった。</p> <p>以上の結果から、訪問看護師は、急性期病院からの在宅訪問を高く評価するとともに期待も大きいことが理解できた。そして、その期待に応じた病院看護師による在宅訪問を充実することが課題として明らかとなった。一方、在宅訪問において病院看護師の対応の不備や能力不足、訪問看護師への負担や不安も与えていることもわかり、それを解決し質の高い在宅訪問を実践していくという課題も明確となった。</p>			
今後の展開			
<p>今後は、急性期病院から在宅訪問を実施するにあたり、院内での業務・教育体制、日頃の地域ケアスタッフとの連携のあり方などその実態を把握する。さらに、病院看護師が在宅訪問を行うための阻害要因や促進要因を探る。そして、急性期病院看護師の退院支援能力の向上と地域ケアスタッフとの連携強化を図るために、質の高い在宅訪問を行う方法を検討する。</p>			